

されどわれらが日々

私達の世代の大学生活はおカネが究極的になかった。5畳のアパートの賄いつきで始まった大学1年は、フランス語に格闘し疲弊し逃亡し、クラスの人と標準語を使ってうまく話せないのが標準語イップスになり苦労した。

毎日学校には行くが、授業の出席がまばらになり、文学研究会なるサークルの部屋に入り浸り、麻雀とビールの毎日だった。食事は、お昼ごろに食べる学食のカレーで過ごした。あと3日間は12円ぐらいしかないのが、アパートの部屋でひたすら読書し、冷蔵庫の氷を食べ腹を満たしたふりをして、3日目の朝、銀行の前に並んで、仕送りのおカネをやっとおろして、その足で学食に行き、カレーを2杯食べた。うれしかった。

おカネがなくても、友達がいれば最低はおごってもらえるので、池袋の通りに知り合いを探すという日々もあった。

なんでおカネがなかったのだろう。答えは簡単。持っているにつかってしまうのである。アルバイトもしなかつたので、毎日暇を持て余す。暇を埋めるためにあちこちさまよう。さまようと店に入る。ほしいものが目に入る。何とかなるだろうと買ってしまふ。金がいつもなくなる。

アルバイトを2年生から始めたが、アルバイトを始めると暇がなくなるので、お金を浪費する暇がなくなった。人が仕事をするのは、浪費することがないように暇を作らないということなのだと思えることができた。

その点、今の生徒たちはきちんとお金を自分で管理してつつましく生活しているのを聞くと頭が下がる。

思うようなこともままならず、東京の片隅でひっそりと生活していたが、何かこだわりをもって大学には毎日通っていた。歩いて通えるアパートに引っ越したのも大きかった。

思いを交わせる心許せる友人も少なく、おカネがなくてもおカネを稼ぐようになっても旅の一つもせず、大学の構内を行ったり来たりしながら過ごした4年間だった。

人から見れば魅力のないつまらない4年間のようでも、今思い返してみても素晴らしい日々だった。何が素晴らしいって、完全なる囚われる時間からの解放としがらみからの自由があった。

おカネがなくても、友人関係が乏しくても、生活に苦しんでも、(時々病気になると独りぼっちで苦しかったが)、されどわれらが日々である。今くらいの心の余裕があったらもっとよかったろうに。生徒諸君も、自分の力で、完全なる時間からの解放としがらみからの自由の4年間を手に入れてください。

